

アメリカ進歩主義教育における保育内容に関する一考察

—— ハワイ・キャッスル幼稚園，ナーサリー・スクールに着目して ——

塩路 晶子

(キーワード：アメリカ進歩主義教育，日系移民)

1. はじめに

19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカにおいて、恩物を用いた保育を中心としたフレーベル主義幼稚園が批判される中で、進歩主義教育の幼稚園が設立されていった。この進歩主義幼稚園は、子どもの興味にもとづいた遊びや、子どもの身近な生活とつながりのある活動を保育の中心としており、現代日本の保育にも通じる多くの重要な要素を含んでいる。

しかしながら進歩主義幼稚園については、いまだ精緻な研究が蓄積されているとはいいがたい状況が指摘されている¹⁾。そこで本稿においては、20世紀初頭のハワイにおいて展開されたヘンリー・アンド・ドロシー・キャッスル・メモリアル幼稚園 (Henry and Dorothy Castle Memorial Kindergarten 以下、キャッスル幼稚園) とキャッスル・ナーサリー・スクールに着目し、その保育内容を分析することを通して、アメリカ進歩主義幼稚園の内実を明らかにすることを目的とする。

それは同時に、20世紀初頭にハワイの子ども人口の約40%近くを占めていた日系人がどのような教育を受けていたのか、ということの一端を明らかにすることにもつながっている。1854年に元年者といわれる日系移民がハワイに到着して以来、日系人はプランテーションを中心として年々増え続けた。やがてホノルル等の都市部においてもハワイ社会に定住していき、多数の日系の子どもたちがキャッスル幼稚園、キャッスル・ナーサリー・スクールにも通っていた。ハワイ日系移民の教育については、タムラ²⁾や沖田³⁾、吉田⁴⁾らの先行研究があるが、就学前教育についての詳細な研究は管見のかぎりでは存在しない。1898年のハワイ併合に伴って、ハワイ日系人の子どもたちは6歳以上の学齢期になると、アメリカ合衆国の公教育を受けることが義務付けられたのだが、子どもたちが学齢期以前に、英語やアメリカ文化を身につける上で就学前教育の果たした役割は大きい⁵⁾。

2. キャッスル幼稚園・キャッスル・ナーサリー・スクールの成り立ちとその特徴

キャッスル幼稚園については、これまでシェーラによるその通史についての研究⁶⁾が行われている。また、キャッスル家の慈善事業全体についての研究の中でキャッスル幼稚園とキャッスル・ナーサリーについて言及したものとしては、アルフレッドの研究⁷⁾がある。ではここでキャッスル幼稚園・キャッスル・ナーサリー・スクールについてその成り立ちを概観し、教育実践の特徴について分析しておこう。

(1) キャッスル幼稚園，キャッスル・ナーサリー・スクールの成り立ち

キャッスル幼稚園の創設者であるメアリー・キャッスル (Castle, Mary, 1819-1907) は、宣教師であった夫のサミュエル・キャッスル (Castle, Samuel Northrup, 1808-1894) の妻として、1842年頃にアメリカ本土のコネティカットからハワイにやってきた。夫は、ビジネスと慈善事業の様々な事業をハワイにおいて展開し、ハワイの五大財閥の一つであるキャッスル・アンド・クック・カンパニーを築いた人物である。

メアリーには9人の子息子女がいたが、その中のヘンリー・キャッスル (Castle, Henry 1862-1895) が孫娘のドロシーと共に1895年に海洋事故の犠牲となり亡くなってしまった。この悲しい事故のメモリアルとして1899年に開設されたのがキャッスル幼稚園である。亡くなった息子のヘンリーが、当時シカゴ大学の教授で進歩主義教育をリードする存在であったデューイ (Dewey, John) と親交があり、教育に興味をもっていたこと、孫のドロシーが5歳児であったことなどが、メモリアル幼稚園を設立することをメアリーに決意させたのである⁸⁾。

それではメアリーはどのような幼稚園をつくらうとしたのだろうか。彼女の娘の一人であり、教育を支援する

キャッスル基金におおいに尽力していたハリエット・キャッスル (Coleman, Harriet Castle 1847-1924) は次のように述べている。「マザー・キャッスルが、メモリアル・スクールには教育の中で、最もすばらしく光り輝く思想の体現化であってほしいと願ったのは、彼女の特性と一致しており、それゆえ彼女が、家族づきあいをしている友人であり、教育における実験がシカゴに対する教育的世界の注目をあびているその人、ジョン・デューイ博士に頼ろうとしたのもまた、自然であった。」⁹⁾つまり、息子と孫娘のメモリアルとしての幼稚園には、最もすばらしい思想を体現化するものであることを願い、そのためにキャッスル家と公私にわたって交流のあったデューイに協力を求めたのである。キャッスル幼稚園はデューイから思想的に大きな影響を受けた進歩主義教育幼稚園として1899年に開設されることになり、アメリカ本土で広がりつつあった進歩主義幼稚園が、遠く離れたハワイ・ホノルルにも普及することとなった¹⁰⁾。

15人の子どもたちを集めてスタートしたキャッスル幼稚園の初代校長には、デューイに教育を受けて選ばれたミス・ラ・ヴィクトーネ (Miss La Victoine) が就任し、その後3代目のミス・エミー・クロス (Cross, Ermine) が1902年に校長に就任してから幼稚園は軌道に乗り始めた。その後、18ヶ月から2歳児の小さな子どもに対して進歩主義教育にもとづいて保育することがより重要視されるようになり、1927年にはキャッスル・ナーサリー・スクールが開設された。キャッスル幼稚園とナーサリー・スクールは、1940年まで保育活動を続け、1941年にハワイ大学附属のプリスクール部門として、移転統合されることになった。

そこで本稿では、分析の対象の時期を1899年の開設から1941年に移転統合されるまでとする。また分析する史料としては、The Story of the Henry and Dorothy Castle Memorial, Henry and Dorothy Castle Memorial kindergarten: A Report, 1930, Henry and Dorothy Castle Memorial kindergarten: A Report, 1935, 及び Calendar of the Free Kindergarten and Children's Aid Association of the Hawaiian Islands を主に用いることとする。これらの史料は、キャッスル幼稚園、キャッスル・ナーサリー・スクールによって発行されたブックレット及び、キャッスル基金が運営していたハワイ無償幼稚園協会が発行していた記録集であり、幼稚園やナーサリー・スクールの保育内容を分析しその内実を明らかにするためには有用な史料である。

(2) キャッスル幼稚園の教育実践の特徴

先にも述べたように、キャッスル幼稚園はデューイから進歩主義教育の影響を受けて実践を行っていた。そのため、子どもたちが幼稚園で行う活動に新しく、オキュペーションを導入していたということが第一の特徴である。校長のエミー・クロスは、進歩主義教育以前の幼稚園について、次のように述べている。「手仕事において本当に多くの変化が見られているので、『ミシン目を開けたり、縫ったり、布を織ったりする学校』としてのオーソドックスな幼稚園は、近代の子どもの庭においてこのようなオキュペーションは全く場違いであるとわかった。しかし古い形は、別のものがそこに位置づけられるのがよりよいと分かるまでやめられないし、より新しいオキュペーションの中に、古いもののすべての原理が内包されているのだ。」¹¹⁾つまり、以前のようなフレール主義のオーソドックスな幼稚園において行われていた手仕事は指先の細かな作業が中心で、それは現在の子どもたちにはふさわしくない、とみなしていた。同時にその古い形式を単に否定するのではなく、古い形式のものの根底にあるよい原理を新しい形式の中に内包して、オキュペーションについて次の4つの本質を進歩主義幼稚園の活動の中に位置づけている。

「第一、教材 (subject matter) は、子どもの興味の範囲の中にあるべきである。4歳から8歳の年齢の中で、彼らの興味は個人の幸せや、簡単な社会的関係において明示され、それゆえ、教材は、子どもに最も近くにあるもの、つまり家庭からはじまり、様々な近隣の活動へと働きかけていくような、社会的環境を包含する生活の側面から選択されるべきだからである。第二に本質的なことは、オキュペーションは子どものエネルギーにとってふさわしいものであるということであり、手が作業に従事すると同様に脳も従事するのであり、子どもの全体性が活動するということである。メンタルな力を訓練せずには手をつかう作業は子どもを『忙しく』するかもしれないが、教育的ではないし、道徳的な側面でさえ、思考と行為が分離していることが指摘されよう。第三に本質的なことは、発達するのが最後になる指先の筋肉よりも、手や腕を使うことがかなり必要なくらい、手仕事は大きいものであるべきである、ということである。・・・(中略-引用者)・・・そして最後に、オキュペーションや手仕事は、教師の役割について、準備は最小限で、子どものための作業が最大限なものが最もよいものである。」¹²⁾

クロス校長がここで第一に挙げているような、オキュペーションにおいて取り扱う教材は子どもの興味の範囲から選択し、子どもにとって身近なものや、家庭から出発して近隣の活動や社会的環境へと徐々に広げていくと

いう発想は、まさにデューイが実験学校において展開していたものと近似している¹³⁾。さらに第二の本質として、オキュペーションは子どもの知的側面と手が全体的に活動してはじめて有効である、と述べている。これは単に子どもたちが手を動かして作業をしさえすれば、子どもが何かを身につけたということではなく、知的な働きと手の働きが協働してはじめて学んだということになるのである。つまりこれは思考と行為の不可分性に言及したものと見える。第三の本質としては、かつてのオーソドックスな幼稚園において行われていたように指先の動きを中心とした手仕事ではなく、手や腕全体を動かして作業することが大切にされている。そして第四に、教師の役割について言及しているが、教師が何もかもオキュペーションの準備し、お膳立てするのではなく、子どもが自由に発想し作業したり興味を生かしたり出来るような「最小限の」準備をすることこそが、子どもにとって「最大限の」教育的効果をもつ活動になることを指摘している。クロス校長がここでオキュペーションの例として挙げているのが、「ドール・ハウス」の活動である¹⁴⁾。子どもたちは年長の子どもを中心に、大工さんに指導してもらいつつ、測定したり、板をのこぎりで切ったりした。また年少の子どもたちも床に敷くマットに仕付け糸をしたり、窓辺のプランターに種を蒔いたりした。そして子どもたちによって作られたドール・ハウス本体やその家具、エプロン、ブラシなどは、クリーニング・デイのときに、掃除するという活動が行われていたのである¹⁵⁾。

このように、子どもの身近な興味あるものから教材を選択し、切ったり縫ったりというような手仕事と、測定するなどの知的な活動を同時に行うことをオキュペーションとして位置づけていたことが、進歩主義教育幼稚園であったキャッスル幼稚園の第一の特徴である。

また、キャッスル幼稚園の第二の特徴としては、多文化な子どもたちへの対応が挙げられる。初期にはハワイアンの子どもたちも園に多数在籍していたようである。彼らは「2, 3世代にわたってすでに英語を話す人々と緊密に触れ合っていたために」¹⁶⁾、たとえ多文化な子どもたちが通園していたとしても、幼稚園において言語の問題はそれほど顕在化していなかった。それが1920年代になると、英語を話さない日系人の子どもたちが、40%程度というかなりの割合で増加してきた¹⁷⁾。

人口の半分近くを占めるようになった日系人の子どもたちはどのような生活環境の中で過ごしていたのだろうか。

「またコミュニティにおいて、(多くの日系人の人口を保持するために)、銀行員、商人、通訳、事務員などがやってきて、これらの家族において父親たちがビジネスのやり取りの中で英語を話す一方で、家庭の言語は日本語であり、このクラス出身の子どもで幼稚園の年齢の子は、母親と一緒に時間の大部分をすごしていて、多くの場合、子どもが幼稚園の門を離れてから、次の朝に戻ってくるまで英語を聞いていないし、私たちの幼稚園において日系人が圧倒的に大部分であるがゆえに、もし教師がその状況に気がついていないとしても、子どもたちが幼稚園で午前中ずっと、自分自身の言葉だけを話す友達と一緒に過ごすことは可能なのである。そしてこの変化は、特別な隣人の社会的状況において、もし私たちが新しいグループの必要性を満たそうとするなら、メモリアル幼稚園における変化をも要求するものなのである。」¹⁸⁾ 日系人は独自のコミュニティをもち、家庭や地域社会において子どもたちは英語を話したり聴いたりする機会が少ないために、英語を身につけることが難しかった。また幼稚園においても日系人の人数が増えているために、保育の中でも、日本語のみで過ごしても困らない状況が指摘されている。そしてこのような状況に、キャッスル幼稚園が直面したとき、保育内容を変化させざるをえなくなっている。それは、幼稚園を卒業し公立学校の1年生に入学するまでに子どもたちに英語を身につけさせ、アメリカ化社会・英語社会への適応をはかるトレーニングを行うということである¹⁹⁾。

まず、日系人の子どもの英語について、成績はそれほどでもなくても、実際には子どもたちは英語を聴き取ることができ、理解することができている、ということが指摘されている²⁰⁾。そして、次に英語を話すことであるが、クロス校長らは、日系人の子どもたちが話すための動機をゲームや練習の中で与える努力をした。そこで、彼らが話すことが難しい理由の一つには、クロス校長らが「日系人の人種特徴」として、「臆病、恥ずかしがり、デリカシー、控えめ」ということを挙げている。しかしそれは必ずしもマイナスに評価していたのではなく、そのよい側面を保持しつつ、どうすればデリカシーをもち、控えめでありつつも自発的な態度をもって英語を話すようにできるか、ということを模索しようとしていたのであった。そして英語を身につけ、英語を用いる社会に適応していくということが、民族の持つ特徴をすべて失ってしまうということにつながっては、「平等ではない」として、オリジナルな文化を尊重しつつも、西欧化社会が求める言葉やマナーを身につける方法を模索しようとしていたのであり、それこそがクロス校長のいう「民主主義的市民化」であったのだろう²¹⁾。

以上のようにキャッスル幼稚園とナーサリー・スクールは、第一にオキュペーションを中心とする進歩主義教

育、第二に英語を話さない日系人を中心とする幼児への対応という、大きく分けて二つの特徴を持っていたことが明らかになった。それでは次に、その保育内容や事例を詳しく分析していく。

3. キャッスル幼稚園の保育内容

キャッスル幼稚園は、3歳児から5歳児まで、年齢別のクラス編成を採用していた。その理由としては、「混合年齢グループと一緒に作業したり遊んだりするべきではない、ということは教育者の意見が一致するところである。なぜなら衝突や感情的混乱を引き起こす、興味や能力の違いがあるからである。」²²⁾と述べられている。次の<表1>に、1930年のクラスごとの人数と教室の場所等を整理しておこう。

<表1> 各クラスの数等 (1930年)

	人数	場所	
3歳児	20-22人 (混合人種)	他から離れたオープンなラナイ	祝祭のときは他の年齢児と一緒に
4歳児	20-25人の3グループ	メイン・ビルディングのラナイ	園庭と部屋の備品を5歳児と共有
5歳児	20-25人	メイン・ビルディングのラナイ (4歳児とは別)	

キャッスル幼稚園では年齢ごとの興味や発達の違いに留意して、年齢ごとにラナイと呼ばれるベランダを中心に使用して保育していた。ハワイ・ホノルルの穏やかな気候を利用して、戸外の開放的な環境の中で保育を行っていたのであろう。特に3歳児については、他の年齢の幼児から少し離れた落ち着いた場所が必要であると考えられていた。また、年齢別の保育ではあるが、様々な人種の幼児たちが同じクラスで一緒に生活していたのである。

(1) カリキュラム

キャッスル幼稚園の教育の主な目的については、次のように述べられている。

「教育の主な目的は本来備わっている能力を個人的に発達するための最もよい環境を提供することであり、そのため全体的に最も完璧に満足いく方法で人生のニーズを満たすように行為をコントロールすることであり、子どもがすべきことが分かり、それをする意思を持ち、挑戦しようとする自信をもてるように援助することである。」²³⁾ここで述べられているのは、子どもを教えるというよりは、子どもに本来備わっている力への信頼であり、それを引き出す環境の構成こそが重要である、ということである。また、幼稚園側が「すべきこと」を明示し子どもが受動的にそれに従うのではなく、子ども自身が「自分のしたいことがわかる」、それを行う「意思」、そしてその意思に従って「挑戦」するよう能動的に活動することを重視しているのである。このような教育の目的に到達するためのカリキュラム編成の方針は、以下の通りである。

「教育の目的を満たすためのカリキュラムは、健康の習慣、シチズンシップ、余暇の正しい使用、実際に役立つものにおける教育を提供しなければならない。この学校はスタッフと組織においてこれらの必要性を満たそうとしている。精神の健康と関連したカリキュラムの主題が十分にバランスが取れていて、創造的な材料、絵画、音楽、演劇を含むべきであるということはよく知られている。もし学校のプログラムが十分にバランスが取れているなら、多くの身体的・心理学的問題は起こらないであろうし、もしそれらがはっきりしているなら、それらはなくなってしまうであろう。」²⁴⁾

第一に、「健康の習慣」には、精神の健康と身体的な健康の両方が含まれていると考えられる²⁵⁾。身体を健康を保つことはもちろんだが、創造的な材料、絵画、音楽、演劇を含むバランスのとれたカリキュラムの主題を設定することによって、子どもの知的側面と情緒的側面を育てることができると考えられていた。第二に、「シチズンシップ」は他者との人間関係と社会とのかかわりに関する問題であると考えられる。ここではこれ以上の説明がないために推測の域を出ないが、キャッスル幼稚園が進歩主義教育の思想にもとづき、オキュペーションを行う中で他の子どもとの協働を学ぶこと、また、多文化な人種の子どものうちで、他の子どもの文化を理解すると同時に、アメリカ社会の一員としての態度を育てることではないだろうか。第三に「実際に役立つものにおける教育」についてであるが、これはオキュペーションなどの中で子どもの身近な生活を取り入れた活動に関連するものであると考えられる。

ではより具体的に三つの時期の保育内容を見るために、〈表2〉のように整理した。

〈表2〉キャッスル幼稚園の保育内容

1918-1919 ²⁶⁾	校長：ミス・クロス アシスタント：9人 幼児数：106人・・小さいグループに分けて保育	保育内容：歌，ゲーム，ランチのためのお米の料理，テーブルセッティング，お皿を片付けたり洗ったり，ナプキンを洗濯したりというような家事が存在し，それぞれのグループが交替してこれらの社会化活動に参加，戸外には鶏やウサギ（食べたり，世話したり），庭仕事，園庭（様々な野外のスポーツをすることができる）
1920年 ²⁷⁾		1920年にはミュージカル鑑賞に力を入れる。1920年6月にハワイの子どもの歌の小さな本を出版予定。この本については、「美しい旋律で表現する私たちの努力の記録であり，日々の出来事の楽しさについてシンプルな言葉を用いた子どもの表現である。」と述べられている ²⁸⁾ 。
1930 ²⁹⁾	開園時間：8時30分～11時15分 40分ごとの時間割 材料の片付け・ランチ・休憩 50分 ディスカッション・ストーリー 25分 園庭 25分 音楽 20分	主な備品（進歩主義幼稚園においてみられるものが揃えられている。） パティ・スミス・ヒルのフロアー・ブロック ³⁰⁾ 粘土，大きなブラシのついた石膏のペイント，木工の材料，お人形コーナーや図書室には大きなクレヨンや他の必需品 園庭の備品：ジャングルジム，ぶらんこ，シーソー，大きな砂場。それ以外にも，すべての子どもたちのための個別のガーデンをもつことができるほど，十分に広々としている。一人ひとりの子どもは思い思いに，自分自身の庭，植物野菜，花をつくっている。

この保育内容をみると，幼児が興味をもつような歌や劇など情緒的側面の教育に関連する活動があると同時に，粘土・クレヨン・木工など創造的な材料を用いた活動を行っている。また戸外においては，固定遊具での遊びだけでなく，飼育動物の世話や栽培活動など自然とのかかわりにも活動の場を広げており，バランスのとれた保育内容になっていることがわかる。またランチのための準備などは，食べることについての生活習慣を身につけるだけでなく，それは「他者のために行く」「他者と共に行く」というシチズンシップにつながる活動でもあるのだ。

それでは次にパティ・スミス・ヒルのフロアー・ブロック（床積木）を用いているプロジェクトについて詳しくみてみよう。

(2) 事例「ボートと列車プロジェクト」

当時の幼稚園において子どもたちの遊びの価値はなかなか認められず，「単なる遊び」であるといった批判があったようである。それに対する応答として，キャッスル幼稚園の典型的なプロジェクトをレポートする，として以下のプロジェクトが紹介されている³¹⁾。

〈ボートと列車プロジェクト〉（5歳児グループ）

（下線・・引用者）

男の子の小さなグループがある朝やってきて，ブロックのところまっすぐに行って，作り始めた。彼らは自分の意図について前もって話し合うことはない，と私たちは知っていた。彼らは熱心に作業しており，近づいて，「何を作っているの？」と尋ねた。

すぐに答えが返ってきて，「ボートだよ。」といった。ボートはこのコースの子どもたちにとって最初から興味のあることだった。新しい蒸気船がマストン・ラインに加えられたばかりで，名前は「マロロ」であった。処女航海に際して，かなり熱狂して，その蒸気船のための壮大なレセプションがあった。最近コミュニティに加わったものについて，この子どもたちによって作られたボートは，「マロロ」という名前になった。遠足は，キャビンや大煙突などの辺りを見るために，ドックに行くことだった。箱や古いストーブ・パイプを詰め込んだ小さい樽が，保育環境に導入されて，キャビン，ドック，大煙突のように組み入れられた。旗のポールは船首に掲げられていた。ある日男の子の一人が蒸気のそばで，小さなボートを作るのに忙しく取り掛かっていて，マロロに結びつけるためのロープがないかと尋ねてきた。・・・（中略―引用者）・・・やる気のある子どもが名前をプリントして船首にそれを貼り付けた。波止場へと続くブロックの階段を加えて，ボートは航海に出る準備が整っていた。大工たちは大いなる成功を証明する最初の挑戦をした。毎日の話し合いの時間で多くの興味ある事実が持ち上がった。³¹⁾まず，人々はボートに行くときにはチケットを持っていなければならない

ということであった。あまりに多くの乗客がいて込み合っていた。チケット・オフィスが計画され作られた。混雑を省みないチケット・オフィスから、すっかり買ってしまうことに反対が起こるまで、最初にすべての子どもが自分自身のチケットを作った。そして彼らはそれが不公平だと考えた。

次にお金の問題が生じた。誰かが銀行を指摘した。すぐにハワイ銀行の新しい建物へと遠足した。・・・(中略ー引用者)・・・子どもたちは空のチェックを持って帰ってきて、伝票を預け入れ、銀行の建物で働くようになった。最も積極的な子どもたちのうちの一人が、働いた人々だけが銀行からお金を得ることができるべきだと言い、そのためすべての人が公明正大に振舞うために、彼は誰も働いていない人にお金がいかにないように見張るために、仕事の時間に監視するのを守衛する警官を提案した。

ここで普及している大変美しい習慣は、特にボートの出発と到着のときに、レイをかけることである。蒸気船の日々は、様々な色の花のレイで実際に大変お祭り騒ぎであった。・・・(中略ー引用者)・・・それらは主に女の子によって作られた。蒸気船のところでレイ売りが次に必要になり、自然に私たちはお花屋さんを持たなければならない。

ボートの機能は話し合いの間にもたらされた。それらは乗客を運ぶだけでなく、郵便や食料も運んでいた。滑車が積み下ろしをするために整えられた。郵便バッグが、それを名づけた男の子の一人が家からもってきた古い麻袋で作られた。郵便配達員のバイクがパティ・スミス・ヒルの積木^②によって作られて、郵便局が必要になった。遠足は郵便局に行き、ある子どもが要求を満たすものを建設した。「ホノルル」「サンフランシスコ」「日本」とラベルされた手紙入れがあった。

ある朝小さい子どもたちの一人がはやくに到着して、自分はエンジンを作るつもりだと知らせてくれた。・・・(中略ー引用者)・・・釘入れ、ストーブ・パイプ、クラッカーの箱、ブリキの缶、木片、修理したベルが、車輪を別として、彼の必要なものとして与えられた。これらを測定する活動が行われ、遠足が近くの工場へと計画された。

プロジェクトを完成するための必要とされた最後のことは、蒸気船の到着や出発時にいつも演奏しているバンドであった。幼稚園バンドが要求され、みんなが航海する準備ができていた。乗客はドックに急ぎ、自分たちのチケットを購入し、友人に心からのさよならを言い、彼らにレイを飾り、蒸気船に乗り込んだ。バンドは「アロハ オエ」を演奏し、彼らは去っていき、友人たちは波止場から陽気にさよならと手を振った。

最初、ボートづくりにとりかかった男の子たちは、最近身近にレセプションがあった新しい蒸気船の「マロロ」におおいに興味を持っており、それを自分たちでもつくりたいと思ったのがこのプロジェクトのきっかけだったのである。そしてこの自分たちのボートについてより詳しく知るために、ドックに遠足にでかけている。それは小規模な「ごっこ遊び」を超えて、ボートづくりのプロジェクトとして発展していく大きな原動力となるものである。

下線部①の記述にあるように、子どもたちは4週間にわたって毎日40分間活動を行い、常に話し合いをもち、興味やアイデアを出し合って活動を進めていった。

船の建造が一段落すると、その乗船をめぐる、チケット発行やお金についてなど、さまざまな活動がダイナミックに展開され、銀行などにも遠足にでかけた。それはコミュニティの中での実際の様子から学び、子どもたちの遊びに生かそうとする姿勢である。下線部②のように、郵便配達員のバイクを作るためにパティ・スミス・ヒルの積木を用いており、プロジェクトを遂行するための様々な素材の一つとして、積木は有用であったことがわかる。

また、ここで当時のハワイの状況をあらわすものとして、船が到着したときにレイをかける習慣や、バンドで「アロハオエ」を歌って送り出す習慣を子どもたちも取り入れている。さらに手紙入れには「ホノルル」「サンフランシスコ」「日本」というラベルをつくり、自分たちの住んでいる場所であるホノルルと、メインランドの都市であるサンフランシスコ、そして半分近くの子どものルーツである日本の地名がラベルされたことも興味深い。

また、このプロジェクトを中心として他の保育内容も構成され、歌やリズム、ストーリー・テリングにも蒸気船関係のものが取り入れられていた³²⁾。

さらに、先に日系人の子どもたちの英語力を培うために、キャッスル幼稚園は話すための動機づけを行おうとしていたということ指摘したが、「ここでも子どもたちのボギャブラリーは、かなり増加し、考えの範囲を表現する能力はかなり改善された。」³³⁾と述べられていて、活動を通して子どもたちが話し合う中で、英語のボギャ

ブラリーを獲得したり, 自らの考えを表現したりできるようになっていったようである。

このプロジェクトの評価について, 次のように述べられている。「私たちはこのプロジェクトが, これまで関わったなかで最も成功したものの一つであると感じているし, 作ったものが完全であるがゆえだけでなく, 生じた付随する学びゆえである。態度の変化やグループの協働は, その間中起こった。コミュニティについてのよりよい知識はもちろん, 獲得された。組織化する, リードする, 開始する能力が何人かの子どもの中に発達し, その子どもたちは前にはそんな兆候はなかった子どもたちであった。」³⁴⁾つまり, プロジェクトが成功したのは, 子どもたちがつくりあげた蒸気船などが完成したという理由だけではなく, その活動を通して子どもたちがさまざまなことを身につけたからである。それは一つには, キャッスル幼稚園の教育の目的の中で確認した「自分がしたいことを見つけ, 意思をもって取り組み, 挑戦する」態度である。その中で, 蒸気船やお金や郵便局など子どもの身の回りのものごとについての知識, レイづくりやバンドなど子どもたちが現在生きているハワイというコミュニティについての知識, そして英語の知識が獲得されている。さらにその活動を通して他の子どもたちと共に常に話し合いを行い, 活動を組織化したり, 時にリーダーシップをとるなど, 他者との協働を経験したのである。これらの学びがあったからこそ, プロジェクトは成功したといえるのだろう。

4. キャッスル・ナーサリー・スクールの保育内容

1927年には, キャッスル幼稚園に引き続いて, キャッスル・ナーサリー・スクールが開設された。このときには, 幼稚園とは別に, 古い幼稚園の建物をリフォームして, 小さなトイレや特別な備品等, ナーサリー・スクールとして可能な限り理想的な環境が整えられた³⁵⁾。このナーサリー・スクールは当時, 単に子どもを預かるだけだったデイ・ナーサリーと自らの施設の機能を明確に区別して, その使命と誇りについて次のように述べている。「これらの学校はデイ・ナーサリーとは異なっており, 違いは明確にされているべきである。デイ・ナーサリーは必ずしも訓練されたディレクターがかかわっておらず, ナーサリー・スクールとして同じ科学的基礎にもとづいて運営されていないのである。ある教育者がいうように, 『それは単に子どものための駐車場である。』一方で, ナーサリー・スクールは, 純粹に教育的施設であり, 子どもと同じくらい十分に親の教育のためにも組織化されており, 特別な教育を受けた人々のみに関わっているべきなのである。」³⁶⁾つまりスクールは, 教育に関する科学的な知識にもとづいて, 乳幼児を教育することをめざしていたのである。それはキャッスル幼稚園で培った思想をナーサリー・スクールに所属するより小さな子どもたちにも適用することによって, 継続的に効果的な教育ができるという見通しがあったからこそであろう。

スクールのスタッフ及び乳幼児数等を年代ごとにく表3 >のようにまとめた。初年度にはディレクター以外の保育者はナーサリー・スクールにおいて乳幼児を保育する訓練をほとんど受けていない者ばかりであるが, 2年目以降はそれが改善されてスタッフが充実し, 乳幼児数も増加していつていることがわかる。

<表3>スタッフ及び乳幼児数³⁷⁾

	ディレクター	アシスタント	栄養士兼料理担当	スクール・ナース	乳幼児数
1927年	1人 (ミス・エリノア・ブラウン: コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ出身の訓練された人物)	6人 (幼稚園での経験はあるがほとんど訓練されていない)	1人	1人 (パラマ・セツルメントよりパブリック・ヘルス・ナースを派遣)	12人
1928年	1人 (ミス・アリダ・シーン: イリノイのNational Kindergarten and Elementary College of Evanstonから学位授与)	4人 (ナーサリー・スクールでの経験と訓練されたスタッフ)	1人	毎日朝の検査	25人
1929年	1928年に同じ			歯科, 予防的治療, 栄養指導, 体重測定のカード等	様々な人種の子ども。専門職, ビジネス, 労働者階級の家庭からきている ³⁸⁾ 。入園希望者多数で多くは入園待ち。

(1) カリキュラム

それでは、ナーサリー・スクールのカリキュラムについて、1930年頃の保育内容を〈表4〉のように整理した。

〈表4〉1930年ごろの保育内容

開園時間：8時30分～14時30分（ただし、多くの子どもは母親の勤務時間の都合で8時前に登園している。）³⁹⁾

午前中	自由遊び	すばらしい気候のため、ほとんど戸外で過ごす。広々としてよく整えられた園庭において、多くの興味深い活動が行われている。子ども用プールの代わりに大きな槽に水が入れられ、子どもたちはミス・シーンと著者によってデザインされたサンスーツ（ワンピース型の子ども用遊び着）を着て、この中で、あるいはスプリンクラーの下で遊んだ。これらの小さい子どもたちがハンマーや釘、砂場のおもちゃ、子ども用車、他の車輪のおもちゃ、人形、家具、粘土、紙、クレヨンなどにかかわった多くのオキュペーション。ジャングルジム、すべり台、ぶらんこ、登りロープ、はしご、コンビネーション・すべり台、車輪のおもちゃで走るプラットフォーム、小さな樽からできている遊び場。
	休憩	
	音楽とストーリー	（短い時間）
昼食	昼食	テーブルは広いラナイにセットされている。ここで子どもたちはテーブルをセッティングし、待っていたり、自分自身や他の友だちに給仕するのを手伝っている。
午後	排泄	
（1時間～1時間半）	午睡	毛布とシーツで覆われた日本の布団が、きれいに掃除された床に敷かれて、彼らのベッドとなる。これらは特に配置のすべての方法の中で最も衛生的である。
	排泄	
	おやつ（アフタヌーン・ランチ）	ミルクとグラハム・クラッカー

これによると、キャッスル幼稚園と同様に、ハワイ・ホノルルの穏やかですばらしい気候の中での保育は、そのほとんどが戸外の園庭で行われていたようである。そこで子どもたちは様々な遊戯や素材にかかわって、自由に遊んでいた。大きな槽にはった水や、スプリンクラーの水を用いた遊び、砂場での遊びなど、乳幼児の感覚にうったえる遊びが多く展開されていたようである。また、ジャングルジム、すべり台、登りロープ等、子どもの全身をつかった遊具が配置されている。室内での教材も紙、粘土、クレヨンなど、子どもが自由にその心を表現できる素材が選択されている。このようないわば「動的な」活動が行われたあとには、休憩と短い時間の音楽・ストーリーという「静的な」活動が配置されているのもバランスがよいカリキュラムといえる。また昼食もラナイというベランダで行われているのも、戸外の自然を生かしていかにもハワイらしい。乳幼児といえども、自分自身や他の友だちの配膳の手伝いをする、という活動も、幼稚園で行われる他者との協働へ結びつく重要な活動である。

午睡については、日本式に床に布団を敷いて寝ているのが興味深い。布団は場所の広さと人数に応じてアレンジでき、収納も容易であるし、衛生的にも干したりシーツを洗濯したり、といった利便性もあって採用されていたのであろう。日系人の子どもが多いことも考えると、子どもたちは家庭の延長のような気持ちで安心して午睡できていたのではないだろうか。

(2) 親とのかかわり

キャッスル・ナーサリー・スクールの大きな特徴として、親との緊密なかかわりを挙げることができる。「家庭と学校の統合は、私たちの制度の組織化において、最も重要な要素の一つである。家庭における習慣のあるセットと、学校における別の習慣のセットによって、子どもは自分自身と世界とのあいだで揺れ動いているのである。問題についての一定の型と個人的な取り組みを確立するときに、家庭との協働がなかったら、学校の努力はすぐ縮小されてしまう。」⁴⁰⁾子どもたちは様々な文化的習慣をもった家庭背景の中で育ち、そこからスクールに通ってきている。子どもたちはスクールの理想とする習慣を学ぶ一方で、家庭とスクールという二つの生活世界の間で、揺れ動いているのである。そこで重要になるのが、家庭とスクールが協働して取り組むことである。

それでは具体的にどのようなことが行われていたのでしょうか。

「親ミーティング」は月1回、ディレクターによって行われており、スペシャル・スピーカーが共に参加することもある。以下の内容は、1935年のレポートに記載されていた「親ミーティング」のテーマである。

1. 一般的ミーティング
2. ガウディン医師による栄養
3. ミス・オルムステッドによるおもちゃ
4. 日系人の母親向けに、ガウディン医師による栄養
5. ミセス・ラッシュによる家庭医療
6. ミス・バビットによる従順
7. ミセス・ラッシュによる性教育
8. 日系人の母親向けに、ミセス・ラッシュによる性教育
9. ハワイ児童図書館・子どもの本の展示部局の、ミス・ショップによる子どものリーディング

このミーティングでは、「校長であるアデリーン・E. バビットが編集した『ナーサリー・スクールの親ミーティングのための概要』というブックレットを用いている。・・・(中略—引用者)・・・最初のミーティングで母親すべてがナーサリー・スクールのやり方のスケジュールをもらい、それは、ナーサリー・スクールのものと可能な限り近づくよう一致するように家庭のスケジュールを決めるようなものである。ナーサリー・スクールに適用することを目的として、ウェイティング・リストにのっている人々に、家庭における子どものスケジュールを変化し始めるよう求めた手紙も送られている。⁴¹⁾としている。つまり、入園前からすでに、母親たちはスクールの習慣やスケジュールに、家庭のものを可能な限り一致させようと努力することが求められていたことがわかる。日系人の多さからか、日系人の母親に特化したトピックスも挙げられている。

また、個人的カンファレンスが月2回以上行われていた。子ども一人ひとりの行動の記録、睡眠・食事・排泄の記録が教師によってとられていたのであるが、一日の終わりに必要があれば親に提示されている。また、これらはミーティングやカンファレンスにおいてディスカッションの材料として用いられることもあった。

さらに、特に力を入れていたのが子どもたちの栄養や食事に関することである。食事メニューのコピーが母親に提供されていた。「栄養士はバランスのとれた毎日のメニューを計画しており、可能な限り緊密にそれらをフォローすることを母親に勧める。アメリカの食べものの準備が実際には知られていないような、オリエンタルな家庭の問題がある。これらの母親は協働して欲しいと切望しており、しばしば指導のために私たちのキッチンへやってきている。ナーサリー・スクールの母親はまた幼稚園の栄養クラスや母親クラブにも出席するように招かれている。」1935年のレポートに記載されていた栄養クラスのテーマは、以下の通りである。

栄養クラスの主題

1. 低体重児のためのケアの方法の導入
2. 卵とバランスのとれた食事
3. ミセス・アベルによる、レバー、玄米、玄米パン
4. スープ
5. 風邪を予防する食事
6. 野菜と食べる習慣
7. 果物、一般的指導による最終ミーティング

様々な文化的背景をもった家庭から子どもたちはナーサリー・スクールに通ってきていた。そこには様々な食事文化があり、様々な生活習慣がある。スクールが目指していたのは卵やスープやパンといったアメリカ的な食事や栄養のとり方をスクールで子どもたちに提供すると同時に、それを家庭においても実践し定着をはかることであった⁴²⁾。食事の摂取はそのまま身長や体重の成長や健康にもつながる問題であり、家庭の協力なしには、なしえなかったからであろう。1935年のレポートには母親もスクールと協働することを切望していると記述されていた。このような取り組みによって、子どもたちの伝染病の感染が減り、体重の増加が改善しているとされている⁴³⁾。

しかし一方で、1935年のレポートには、母親ミーティングの出席者の少なさや、母親たちの無関心を嘆く様子が記述されている⁴⁴⁾。母親たちの無関心を解消し、興味や動機付けを行い、家庭とナーサリー・スクールの協働を密にするために、スクールのディレクターたちは次のような努力をしていた。それは、看護婦や担任教師による電話、家庭訪問、タイプ打ちした記録（身体検査、予防接種、トキソイド注射、ツベルクリン検査、親ミーティング、栄養クラス、母親ミーティングのお知らせなど）を子どもが家庭に持って帰ったり、欠席者には郵送すること、学校医による診察と相談・アドバイス、ハワイ大学の児童心理学者による検査とアドバイス、個人的なカンファレンスやレポート作成等である⁴⁵⁾。

子どもたちが持って帰る手紙には、「1ヶ月に1度くらい、ナーサリー・スクールの活動について述べている回報が、ナーサリー・スクールの校長によって送られている。それは、遠足、グループと個人の両方の成長と発達についてであり、個人の成長は他の成長を援助するものであるし、大変個人的なものではないのである。」⁴⁶⁾と述べられており、子ども一人ひとりの成長は、他の子どもとのかかわりと深い関係があることを示している。ここには家庭の子育てとは違ったナーサリー・スクールという集団の場での保育の意義が提示されているのだろう。

これ以外にも、親がスクールを訪問し自分の子どもの活動を観察することが推奨されていた。このときには、スクール側が親に「観察枠」を提示しており、「これによって彼女はより知的に観察することができるし、彼女が子どもから期待されていることについての考えをもつことができるのだ。この利点は明らかである。訪問者はいつも歓迎されているし、幼稚園やナーサリーにいることが推奨されている。」⁴⁷⁾としている。実際にナーサリー・スクールや幼稚園の保育に参加観察することによって、親に子ども理解を深めさせるという実践は画期的である。しかもただ漫然とその場にいるだけでなく、「観察枠」を提示し、どのような点をどのように理解すればいいのかという視点までも与えていたのは、それを家庭にもちかえって自らの子育ての中で応用してもらいたい、という願いがあったからであろう。

また、親のための図書室も設置されており、『ペアレンツ』『新時代』『ハイジア』『児童研究』『NEAの機関紙』『スクール・ライフ』のような雑誌も予約購読されていた⁴⁸⁾。

5. まとめ

以上のように、キャッスル幼稚園とキャッスル・ナーサリー・スクールの保育内容を分析することを通して、19世紀末から20世紀初頭にかけてのハワイの就学前教育において、進歩主義教育が展開されていた様子を明らかにした。それは、メインランドの進歩主義教育のリーダー的存在であったデュエイの思想を受け継ぎ、子どもの興味や生活に身近なものについての主題や教材を中心としたオキュペーションやプロジェクトを展開するものであった。

そこには、ハワイ独自の様相も見られる。それは、1930年前後に園に在籍していた多数の英語を話さない日系人の子どもたちが保育内容に与えた影響である。キャッスル幼稚園の教師たちは就学を見据え、子どもたちがアメリカ社会に適応していく必要性を考慮に入れ、英語を理解すること・積極的に話すこと、アメリカ的生活習慣を身につけること、アメリカの衣服を着ることなどを教えていく。しかしそれは、子どもたちに無理に教え込むのではなく、進歩主義教育の思想や教育方法にもとづき、子どもの興味を喚起し、子どもが身近に接するものから保育に取り入れていったのである。しかも、保育内容の中には、行事としての日本の「ひなまつり」を行ったり、歌のテーマとして「こいのぼり」を取り上げたり、ナーサリー・スクールでの午睡に日本の布団を用いるなど、日本文化を取り入れていた側面も見逃せない。

しかしながら、幼稚園の外では日系人の子どもは英語に触れる機会が少なかったこと、アメリカ的な「栄養のある」食事習慣を子どもに身につけさせるために家庭と協働するときにも、子どもは習慣の違いの狭間にいたことなどを考えると、幼稚園やナーサリー・スクールが保育内容として取り上げていた「子どもにとって身近なもの」が、日系人の子どもの生活世界において「本当に」身近であったかどうかは疑問の余地がある。特に幼稚園開設当初に通園していた日系人の子どもは、日系一世のもっていた日本の生活習慣の影響を強く受けていたと考えられる。むしろ時間を経て、キャッスル幼稚園やナーサリー・スクールの保育の中で、子どもたちはアメリカ的な生活や習慣を学び身近に感じるようになっていったのであろう。

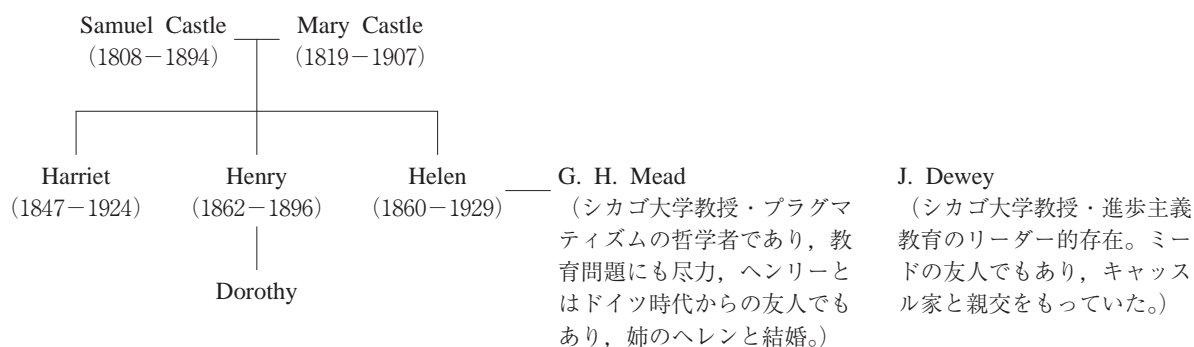
キャッスル幼稚園のクロス校長が出版した歌の本には、民族の衣服を着た日系人や韓国系、中国系、ハワイアン、白人など、様々な人種の子どもたちが手をつないで木の周りをまわりながら歌い踊っているイラストが掲載

されている⁴⁹⁾。キャッスル幼稚園で実際にそのようなことがあったかどうかということは断定はできないが、それを理想とし目指していた、ということは指摘できるのではないだろうか。

付記

本研究は、平成21年度の日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究（B）21730628）の交付を受けて行ったものである。

- 1) 阿部真美子「アメリカ幼児教育史研究の到達点と課題」『幼児教育史研究』第2号, 2007年, 41頁。
- 2) Tamura, Eileen H., *Americanization, Acculturation, and Ethnic Identity*, University of Illinois Press, 1994.
- 3) 沖田行司『ハワイ日系移民の教育史』ミネルヴァ書房, 1997年。
- 4) 吉田亮『ハワイ日系2世とキリスト教移民教育』学術出版会, 2008年。
- 5) 20世紀初頭のアメリカにおける多文化な背景を持つ子どもたちと幼稚園教育の関係については, Betty, Barbara, "The Letter Killeth": *Americanization and Multicultural Education in Kindergartens in the United States, 1856-1920*, Kindergarten and Culture, Yale University Press, 2000を参照。
- 6) Shera, Caroline Sharman, *The Henry and Dorothy Castle Memorial Kindergarten: a Transnational Perspective*, Thesis (M. Ed.), University of Hawaii, 1996.
- 7) Castle, Alfred L., *Harriet Castle and the Beginnings of Progressive Kindergarten Education in Hawaii 1894-1900*, The Hawaiian Journal of History, 23, pp.119-136, 1989, Castle, Alfred L., *A Century of Philanthropy A History of the Samuel N. and Mary Castle Foundation*, Hawaiian Historical Society, 2004. (このアルフレッドの研究を手がかりに, キャッスル家とデューイを中心とする進歩主義教育とのかかわりを, 勝村が紹介している。勝村とも子「19世紀末ハワイ無償幼稚園運動に於けるキャッスル一族の貢献とジョン・デューイの進歩主義教育の関わり」『研究報告集』大阪私立短期大学協会, 38号, 2001年)
- 8) *The Story of the Henry and Dorothy Castle Memorial*, p. 3 なお, キャッスル家の中で進歩主義教育に携わった人物とシカゴ・プラグマティストとのつながりは以下のように整理される。



- 9) *ibid.*, p. 3.
- 10) なお, デューイ夫妻は, 日本・中国への視察旅行の際に, ハワイ・ホノルルにも立ち寄り, キャッスル幼稚園を訪問している。(*ibid.*, p. 3)
- 11) *Calendar of the Free Kindergarten and Children's Aid Association of the Hawaiian Islands*, 1902, p.25
- 12) *ibid.*, pp.25-26
- 13) 森久佳「デューイ・スクール (Dewey School) における幼児教育のカリキュラムの特色とその位置づけに関する一考察」(『教育学論集』大阪市立大学文学部教育学教室, 第30号, 2004年) に詳しい。
- 14) *Calendar*, op. cit., p26
- 15) 1902年の『カレンダー』には, 「キャッスル幼稚園のハウス・クリーニング・デイ」と名づけられた写真が掲載されている。幼稚園のラナイの外側の中庭に作られたドール・ハウスの屋根にのぼってハタキのようなものでそうじする子ども, ハウスの入り口あたりの机に手をかけている子ども, イスに座っている子どもたちが写っている。写真に写っている4人の子どものうち3人は日系人のようで, 着物を着て下駄をはいてこの活動に取り

組んでいる。(Calendar, op. cit.)なお、これと同じ写真がThe Story of the Henry and Dorothy Castle Memorialにも再掲されており、そこには「1902年に撮影した写真：人形の家的那うじ、この写真は1902年秋に撮影された。その後、民族衣装は着なくなり、すべての学校の子どもたちは、見た目のよいものではないが、よりアメリカ化されているアメリカの衣服を着るようになった。」という説明書きが添えられている。(The Story of the Henry and Dorothy Castle Memorial, p.10)

また、キャッスル幼稚園のランチでの箸の使用も1926年に中止されている。(Babbitt, Adeline, A program for children from 18 to 72 months in the Hawaiian situation, with provision for parent and teacher education, Bureau of Publications, 1948, p.64)

16) The Story of the Henry and Dorothy Castle Memorial, p. 8

17) 1929年から1930年の子どもたちの人種の割合をみても、日系人：48%、ハワイアン：1%、パート・ハワイアン：11%、白人：16%、中国人：16%、韓国人：1%、フィリピン人：2%、混血：2%となっており、日系人の多さが群を抜いている。(Henry and Dorothy Castle Memorial kindergarten: A Report, 1930, p.19)

18) The Story of the Henry and Dorothy Castle Memorial, pp. 8 - 9

19) *ibid.*, p.13

20) *ibid.*, p.14 なお、1927年から1940年までキャッスル幼稚園の校長であったバビット (Babbitt, Adeline) は、幼稚園やナーサリー・スクールの子どもたちの語彙の増加について調査研究を行っている。(Adeline Emily Babbitt, A Vocabulary Study of Preschool Children, A Thesis Submitted to the Faculty of the University of Hawaii in Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree of Master of Arts, University of Hawaii, 1931) またバビット校長は、子どもたちが英語を身につけることが彼らの将来にとって必要不可欠である、ということにも言及している。(Babbitt, Adeline, A program for children from 18 to 72 months in the Hawaiian situation, with provision for parent and teacher education, Bureau of Publications, 1948, pp.31-32)

21) *ibid.*, pp.14-15

22) Henry and Dorothy Castle Memorial kindergarten: A Report, 1930, p.17

23) Henry and Dorothy Castle Memorial kindergarten: A Report, 1935, p.13

24) *ibid.*, p.13

25) 幼児の身体的・精神的・音楽的・感情的発達についての記録カードを継続的に、3年間続けて取っており、担任教師だけでなく、様々な教師からの記録が提供されていた。(Henry and Dorothy Castle Memorial kindergarten: A Report, 1930, p.20)

26) Calendar of the Free Kindergarten and Children's Aid Association of the Hawaiian Islands, 1918-1919

27) The Story of the Henry and Dorothy Castle Memorial, p.10

28) この本とは、1923年に出版されているChild songs from Hawaii, A book for school and home, C.C. Birchard & Company であると思われる。「ワイキキにて」「花のレイ」「虹」など、子どもにとって身近なテーマの歌が掲載されている。また、「こいのぼり」など、日系人の子どもたちになじみのあるものについての歌や挿絵もある。

29) Henry and Dorothy Castle Memorial kindergarten: A Report, 1930

30) なお、パティ・スミス・ヒルのフロアー・ブロックは、1916年からキャッスル幼稚園に導入されている。(The Story of the Henry and Dorothy Castle Memorial, p.10)

31) Henry and Dorothy Castle Memorial kindergarten: A Report, 1930, p.23-28 (なお、アルフレッドの先行研究には、1930年の『A Report』に記録されている「自動車」のプロジェクトが再掲されている。Castle, Alfred L., A Century of Philanthropy A History of the Samuel N. and Mary Castle Foundation, Hawaiian Historical Society, 2004, pp.57-58)

32) 例えば、Frear先生の「Steamer Day」、スティーブンソンの「Where Go the Boats」、 「The Three Engine」という物語、E. Boyd Smithの「Railroad Book」を用いたり、「Steamer Day」「My boat is Sailing」「I'm the Captain of a Tidy Little Ship」「I'm a Big Black Engine」を歌ったり、汽車のリズムを楽しんだりした。(Henry and Dorothy Castle Memorial kindergarten: A Report, 1930, p.28)

33) Henry and Dorothy Castle Memorial kindergarten: A Report, 1930, p.28

34) *ibid.*, p.28

- 35) *ibid.*, p. 14
- 36) *ibid.*, p. 12
- 37) *ibid.*, pp. 12–13
- 38) *ibid.*, p. 16
- 39) *ibid.*, pp. 15–16
- 40) Henry and Dorothy Castle Memorial kindergarten : A Report, 1935, p. 24
- 41) *ibid.*, p. 27
- 42) なお, 1920年代から30年代にかけて, アメリカ本土においても子どもの栄養や健康を守ることこそが「良い母親」であるとの言説が流布されていき, 様々な衛生用品や栄養のある食事, 家事用品等が開発されていく。詳しくは原克『アップルパイ神話の時代—アメリカ モダンな主婦の誕生』(岩波書店, 2009年)を参照。
- 43) Henry and Dorothy Castle Memorial kindergarten : A Report, 1935, p. 23, p. 28
- 44) *ibid.*, p. 23
- 45) *ibid.*, pp. 24–25
- 46) *ibid.*, p. 27
- 47) *ibid.*, p. 28
- 48) *ibid.*, p. 29
- 49) Cross, Ermine, and Elsa, Child songs from Hawaii, A book for school and home, C.C. Birchard & Company, 1923

A Study of the Curriculum and Contents in American Progressive Education

— Focusing on Castle Kindergarten and Nursery School in Hawaii —

SHIOJI Akiko

This study aims to show the features of American progressive kindergarten in the early 20th century, through analyzing the curriculum and contents of Henry and Dorothy Castle Memorial Kindergarten and Nursery School in Hawaii. This kindergarten was established by Mary Castle at Honolulu in 1899 and influenced from John Dewey. And in 1927, the nursery school was established because educating younger children was important. Children could select the subject matter based on their own interest. And the objects which were used in the school, were made up of something accessible to children. For example, children's activities were preparing lunch, washing clothes, caring for pets, gardening, drawing, playing with clay, floor blocks, and so on. They expressed freely how they felt and what they thought.

And multicultural children entered the Castle school. In the 1930's about 40% of the children were Japanese. Most of their parents were immigrants for plantations and then moved to Honolulu to work at an office or do business. They needed to gain American behaviors, habits, and understand English before entering Public School. In Castle School, teachers gave the skills to Japanese children through the progressive educational ideas and methods. But it may point out that some activities, materials and habits in the Castle school were not familiar to Japanese children. Though being confused about the difference of habits between school and home, they acquired the skills.